

ルシファー政権と縁を切らねば、我々は集団で滅びます

Greatchain

December 16, 2022

以下は、Information Clearing House に載った、Mary Dejevsky という人の論文を、訳したものである。上記のタイトルは、これと関連づけられている。

我々はロシアがなぜ、ウクライナを侵略したかを 話し合わねばならない

この議論なしには、永続する平和のために、何が必要かを理解することができない。

ロシアを、本来的に攻撃的で、帝国主義的な国家であると見る人々は、ロシアを敗退させ、そのやり方の間違いを認めさせねばならないと主張する。

過去 10 か月の間に、ウクライナ戦争の痛々しい現実から目をそらして、この紛争から起こってくる、より幅広い、多くの問題をじっくり考えなければ、それはほとんど不道德な贅沢ではないかと思われたときが、何度もあった。その善悪は非常にはっきりしている：—ロシアは、ある主権国家を自分の意に従わせようとして、軍事侵略を始めた。それは国際秩序のあらゆるルールを破った。それは侵略者だ。それ以上、何を言うことがある？

いくらでもある、と私は言いたい。なぜなら、何が起こったか、どのように起こったかについては、全体が合意しているが、**なぜか**については、2つの全く異なった、正反対とも言える見方があるからである。

最初の見方は、今年の 2 月 24 日に、ロシア軍がウクライナを侵略して以来、西側の政治的な主流メディアを、支配してきた見解である。それによると、この戦争は侵略戦争である。ロシアは本質的に帝国主義的な強国で、その目標は、ソ連邦ではないにしても、ロシア帝国を取り戻すことにある。ある者は、それは何よりプーチンが悪いのだと言い、この侵略は、常にウクライナはロシアの（従属的）一部であって、そうでなければならないという、彼の脅迫観念的な信念からきていると言う。また他の者は、それはリーダーというより、国家の考えなのだという。

しかしそこから導かれる結論は同じである。まず、プーチンが倒れるか、モスクワが「行いを改め」ない限り、ロシアを扱うまともな方法はありません。そして第二に、東および中央ヨーロッパ諸国は、やはり正しかったのだ：— 彼らが自衛のために NATO に加入したのは、正しい決断だった。もしウクライナに、同じ保護を受ける余裕があったら、この戦争は起こらなかったかもしれないのだ。

もう一つの見方は、ほとんど鏡像のように対称的なものなのに、最初のものほど耳にしない見解である。これによると、ロシアのウクライナに対する戦争は、その根において防衛であって、モスクワがその安全保障にとって、ますます増大する——そして致命的な——脅迫と見たものに対して、撃って出たものなのだ。

ロシアは、1991 年のソヴィエトの崩壊後、弱体化するのを感じていた。それは 1990 年代を通じ 2000 年代初期まで、かつてのワルシャワ協定諸国とバルチック諸国が、西側同盟に加盟している間、しっかり耐えていた。しかし今、ウクライナは、英米両国から誘惑され、法的にはないが、事実上、NATO メンバー同然の立場にある。

その数年の間、ロシアは、何らかのヨーロッパ全体の、安全保障の取り決めに要求していたが、無視され、反対されるだけだった（最も新しくは 2021 年 12 月）。次の段階では、アメリカの重量兵器がウクライナに配備され、NATO が、ロシアまたはその“政権”を、攻撃することしかあり得ない所まで来た。自分自身の安全保障を怖れたロシアは、意図が事実になる前に、先制攻撃するしかないと判断した。

この第二の見方は、西側による行動を、ロシアを戦争に押し出す、大きな、決定的というべき要因と見るものだが、これが最近、手ごろで品のいい冊子として出版され、「いかに西側がウクライナに戦争をもたらしたか」(Siland Press, 2022) というタイトルがつけられている。著者は Benjamin Abelow という医療研究の実績をもつアメリカ人で、核兵器問題についてワシントンで仕事をしていた。これは特に、この戦争の起源について、ほとんど一般に討論がされていないヨーロッパで、一部の人々の琴線に触れたようだ。

アベロウは、この簡潔な 70 ページ本で、この戦争を、より広い歴史的なコンテキストに置き、ロシアの侵略より前の、西側による戦闘行為を数え上げ、それがモスクワで、どう見られたであろうかを説明している。彼はまた、アメリカの政治家たちが、早い時期に警鐘を鳴らし、NATO のロシア国境への進出が、戦争に繋がるかもしれないと言い、それは緊張を高めるものではないが、現実の戦争だと言っていることを、指摘している。

そこには、ヘンリー・キッシンジャー、亡くなった外交官でロシア・ウォッチャーの、ジョージ・ケナン、ソ連が崩壊するときモスクワで米大使を務めた、ジャック・マトロックが含まれている。そして興味あるのは、もう一人の元駐モスクワ米大使で、現 CIA 長官のウィリアム・バーンズで、彼は、戦争が始まって以来、ロシアの相手方に面会した、ごくわずかの米高官の一人である。これは、ライト級のラインアップではありえない。しかし彼らの忠告は蹴られた。それは一つには、どんなロシアの反応も、差し止められる可能性があるという、コンセンサスのためだったようだ。

(一部略…)

ある章で、アベロウは立場を逆にして、仮説的に、もしアメリカが——いまだに神聖なモンロー主義の立場から——モスクワが、アメリカの近辺で、同じような活動をしているのを見たとしたら、どう反応したであろうかを考えている。最後に彼は、もし西側が、肝心な段階で、異なった決定をしていたら、ウクライナの戦争は避けられたかもしれないと考えている。そして、この円を四角形にしてみる。

どちらを応援する者も、現に起こっていることから、自分の正しさを論ずるだろう。ロシアを常に脅威と見ていた人々は、この侵略によって、自分の正しさが証明されたと言うことができる。一方、この侵略を、本質的に自己防衛だと見る人は、NATO の東への進出を非難することができる。そのように議論は展開する。

ただ、戦争の初期の数日以来、西側の政策立案者とメディアの間に、なぜそれが起こったのかを理解しようとする、一方的な欲望が見えたときから、この議論の応酬はほとんど起こらなくなった。私はさらにこう言いたい。アベロウの提起する議論は、大きく私の見解でもあるが、大西洋の両側の**権力者たち**によって、取るに足りない見方として、効果的に無視されてしまった。それを主張する者たちは、発表の場を奪われ、騙されている者たちとして退けられ、クレムリンの弁明者、さらには裏切り者として、悪口を浴びせられた。

この時点で、あなたは、ロシアの行動には、全く反対の見方があることが、現実の問題なのではないかと、問うかもしれない。確かに、いま絶対に重要なことは、ウクライナが独立国として生き残るように、援助することである。しかし、**それが重要なのは、どうしてロシアが侵略したのかを理解することなしには、永続する平和のために何が必要であるかが、全く理解できないからである。**

ロシアがもともと、侵略的で、帝国主義的な国家であると考える人々は、ロシアは敗北させられ、自分のやり方の間違いを、認めさせねばならないと主張する。そうしないと、ヨーロッパ全体は、バルチック諸国からポーランドまでが、危険なことになる。彼らの運命

は、ナチス・ドイツや、第二次大戦の時と同じになるだろう。平和会談を奨励してきた人々（私自身を含めて）が、「宥める者たち」 appeasers と呼ばれるのは、そこから来ている。

もしこれに対して、戦争は、ロシア自身の西側に対する弱さへの、恐怖を反映するもので、NATO が東へ向かうに際して、最後の緩衝器を失う恐怖であるなら——ついでながら、これは戦場で十分に証明された弱みだが——そこから引き出される結論は全く別のものになる。言えることは、モスクワの完全な敗北や政権交代を要求しても、何も終わらないということである。それはロシアを脅して、より危険なものにするだけだろう。実際、更につけ加えるならば、戦争阻止の名において、昨年未だに、西側によって出された好戦的な警告は、現実的には、逆の効果しかあらわさなかった。

こんな議論を口にするだけでも、それはウクライナを売り物にすることになる、と言う人たちがいるだろう。しかし事実はその逆である。主権的独立国家としてのとしてのウクライナの生き残りこそ、我々の要求するものである。しかし、西側がウクライナの生き残りを保証することなど、とうてい考えられない。そして、アメリカ、NATO、それに EU は、今後、必ずこれを要求してくるだろう——もちろん、ロシアの安全保障への要求など認めることなく。

ロシアが、そのポスト・ソヴィエトの境界内で、安全を感じずようになって初めて、その隣国たちも、彼らの境界内で安全でいられるだろう。そのために要求されることは、ヨーロッパ全体のための、新しい安全保障の取り決めであり、あの古い武器コントロールの留め金も、おそらく必要だろう。その時まで、ヨーロッパに永続する平和はありえず、新しい紛争の脅威も、核紛争さえ続くであろう。

[Greatchain 訳注]

この論文の著者は、名前から女性だが、非常にバランスの取れた、確かな見通しをもった、すぐれた論客である。こういう人が、我々の政治家の中にもいてほしいと思う。

不吉な予想だが、今後、我々の間では、犯罪も暴力も自殺も増えるものと思われる。どんなことでも「反社会的」なことをする人がいたら、「反社会行動禁止法」や「反自殺法」を作るのではなく、その原因を考え、Mary Dejevsky の言うように「なぜかを話し合わねばならない」。

プーチン大統領が、ウクライナ侵攻を決断したとき、「これしか方法がなかった、理解してほしい」という意味のことを言った。それは皆が聞いたはずである。しかし、みんな

が寄ってたかって、そんな話は聞いていないことにした。一方的にロシアが悪いことにした。子供の歌にあるように「みんな態度で示そうよ」と合唱した。その結果として、双方の被害がますます大きくなった。

そして、この論文の明敏なところは、「なぜそうなのか、その理由を話し合う」ことを阻止する「権力者たち」The Powers That Be がいることを、指摘していることである。我々の間では、そんなものは存在しないことになっている。知っている人も、知らなかったことにしている。そして我々は、国民総崩れとなって、破滅あるいは墮落の一途をたどりつつある。